

『就実論叢』第47号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2018年2月28日 発行

潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育 —2017年度活動報告—

**Report on the Activities of the Recurrent Education and the Job Training Project
for Potential Nursery Teachers : A Report of the Activity 2017**

柴 川 敏 之 ・ 笹 倉 千佳弘
Z. 山 田 章 子 ・ 荊 木 まき子
伊 藤 優 ・ 田 中 誠
鎌 田 雅 史 ・ 秋 山 真理子
松 本 希 ・ 澤 津 まり子

潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育 —2017年度活動報告—

Report on the Activities of the Recurrent Education and the Job Training
Project for Potential Nursery Teachers : A Report of the Activity 2017

柴 川 敏 之 (幼児教育学科)・笹倉千佳弘 (幼児教育学科)

SHIBAKAWA Toshiyuki SASAKURA Chikahiro

Z. 山田章子 (幼児教育学科)・荊木まき子 (幼児教育学科)

Z.YAMADA Akiko IBARAKI Makiko

伊 藤 優 (幼児教育学科)・田 中 誠 (幼児教育学科)

ITO Yu TANAKA Makoto

鎌 田 雅 史 (幼児教育学科)・秋山真理子 (幼児教育学科)

KAMADA Masafumi AKIYAMA Mariko

松 本 希 (幼児教育学科)・澤津まり子 (幼児教育学科)

MATSUMOTO Nozomi SAWAZU Mariko

I. はじめに

現在、岡山県では、保育所入所希望者が年々増加しており、保育を支える保育士の人材確保が急務となっている。今を生きる子どもたちの健やかな育ちを支援し、かつ、社会参画し自己実現を図りたい保護者支援のためには、待機児童の解消が必須条件である。資格を持ちながら保育士として働いていない潜在保育士を掘り起し、保育所等への職場復帰に向けた支援が必要とされている。

そこで、現場経験がない、結婚・出産によって退職した、長期にわたって保育から遠ざかっている等の理由から、保育士の仕事への復帰を思い悩む人のために各種の研修会を実施し、復帰への後押しを行うことを目的として、本学幼児教育学科では、平成26年度に潜在保育士復職支援プロジェクトを立ち上げた。平成26・27年度は岡山県の委託事業として、28年度は公益財団法人福武教育文化振興財団の助成を受けて活動した。

初年度は卒業生を対象として実態調査を実施し、潜在保育士の離職の要因を探った¹⁾。その結果、保育現場における人間関係を中心とした職場環境が大きく影響していることが示された。一方、現職者へのケアとして、職場環境を改善することによって、働く意欲を高める必要がある。離職者を防ぐ対策の一環として、卒後の継続したリカレント教育の実施も求められている^{3) 4)}。実態調査と並行して、潜在保育士の復職支援研修及び情報交換会を実施し

た。

平成26年度から28年度までの3年間の活動をまとめた報告²⁾では、残された課題として、「受講者の拡大」、「研修日程」、「リカレント教育との関連」という3点が指摘された。受講生の拡大というのは、潜在保育士復職支援研修の知名度が不足しており、受講者の数が少ないということである。広報活動のさらなる工夫が求められるであろう。研修日程というのは、受講者の参加しやすい時期や曜日について検討の余地があるということである。受講者が多いと予測される年齢層への配慮が求められるであろう。リカレント教育との関連というのは、潜在保育士復職支援研修をリカレント教育として位置付けるということである。本講義が現在保育士として働いている保育者の悩み解決の糸口となる可能性を有していることから、現職者ケアという意味をもつことにもつながるであろう。

本報告は、上記のような課題解決を念頭においてすすめた、平成29年度の潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育について、その経過及び結果をまとめたものである。

Ⅱ. 活動の内容

本年度も昨年度に続き実態調査に基づいて、潜在保育士だけではなく、現職保育者を対象とした卒後リカレント教育の場を兼ねて研修を実施している。

1. 研修会

潜在保育士復職支援研修会を本年度は5講座、本学において実施した。詳細は表1の通りである。

表1. 平成29年潜在保育士復職支援及び卒後リカレント教育研修会一覧

日 程	講義内容（10時～12時）	受講者	講義内容（13時～15時）	受講者
8月26日	①声楽（Z. 山田）	10名	②教育相談（荊木）	9名
9月2日	③保育者論（笹倉）	11名	④環境（伊藤）	8名
9月9日	⑤図画工作（柴川）	9名	⑥情報交換会	9名
9月12日	⑦就実こども園での体験実習（9時～16時）受講者3名			
9月16日	⑧就実こども園での体験実習（9時～16時）受講者2名			

*本年と次年の2カ年で1サイクル（全科目）になるよう、実施予定

以下に研修会の様子を示す。

①声楽

日常の保育の現場での話し方や歌唱の際に必要な音楽の基礎的能力、表現力の大切さについて触れた。そして、保育活動に起因する腰痛を防止するためのストレッチや筋力トレーニングを行った。他にも、「はじまるよ」、「おべんとうばこのうた」、「あめふりくまのこ」などの手遊び歌を通して、言葉やリズムの楽しさを伝え、子どもの心を惹きつける歌唱法を実

践した。

②教育相談

子どもの様々な行動への関わり方や、保護者に対する支援について講義を展開した。友だちができてにくい子についての要因別の特徴や、保護者を取り巻く現代の様々な社会的要因などに触れながら、事例を元に受講生はグループ討論で意見を交換した。また、子どもにも保護者にも「カウンセリングマインド」を持つことで、気持ちに寄り添った対応ができることに触れ、まず相手を「受け入れる」ことの大切さを伝えた。

③保育者論

保育士が現場で直面する課題として「子どもの最善の利益の保障」をめぐる話を中心に行った。他者との関係で、いかなる人でも肯定される「存在肯定」を基に、「これでよい」という自己肯定感を伸ばす保育・教育の実践が大切である。また、テーマに沿って「人の多様性」について考えていき、多数派だけでなく、少数派も常に視野に入れておこうとする姿勢の重要性を伝えた。

④環境

保育と環境について写真や動画を交えながらの講義を行った。それぞれ園によって環境は異なっているが、子どもの興味・関心に基づきながら、臨機応変に対応していくことの必要性を示した。また、子どもたちそれぞれの意思や個性を尊重し、子どもの感性を生かすことに重点を置いたイタリアのレッジョ・エミリア市の実践ビデオを紹介し、様々な経験を通して子どもたちの関心や感性が育っていくことを解説した。

⑤図画工作

前半は本学オリジナルの「首掛け式パネルシアター」と「折りたたみ式ダンボールハウス」などの教材の紹介や、保育士が効率よく作業するための裏技などを紹介した。後半は、ロープや蚊取り線香など身近なものを敷きつめ、好きな部分をローラーと黒インクで写し取る「ローラー拓本」の実技を行った。いろいろな模様が浮かび上がる発見を「発掘体験」と称して行い、でき上がった拓本作品に裏から色を着色してステンドグラスのように仕上げる「裏彩色（うらざいしき）」の技法を体験し、様々な展開例を紹介した。



①声楽



②教育相談



③保育者論



④環境



⑤図画工作



⑥情報交換会



⑦就実こども園での体験実習（9月12日）



⑧就実こども園での体験実習（9月16日）

2. 情報交換会

⑥情報交換会

復職保育士や地方自治体の担当者を交えた情報交換会を、平成26年度及び28・29年度は本学で、27年度は山陽学園短期大学と共催し学外で実施した。

平成29年度は、岡山市岡山っ子育成局保育・幼児教育課の担当者2名から、保育士復帰を後押しする話や、再就職に関する取り組みを説明していただいた。また、今年からの復職に成功した昨年度の本研修受講者（現私立保育所非常勤職員）を講師として招き、本研修を受けるきっかけや就職までの経緯、働いている現在の状況などについて語っていただいた。そ

の後、受講生の再就職にあたっての心配事や疑問点について、岡山市の担当者2名及び講師との質疑応答を行う中で、活発に意見交換を行った。

3. 体験実習

⑦⑧就実こども園での体験実習：

就実こども園において保育士の日常業務を体験した。本年度も昨年度に続き2日間実施した。詳細は表1の通りである。この実地研修では、保育の環境における基本を学び、午睡中には入ったクラスの担任への質疑応答の時間を設け、個別の対応について解説を聞いた。子どもと直接関わる中で、年齢による発達過程や個人差等の違いを理解したうえで、その場に応じた対応の仕方を学習する機会となった。

Ⅲ. 得られた成果及び評価

1. 研修アンケート調査

1) 研修会の受講者に対し、無記名式のアンケートを実施した。その結果は以下の通りであった。

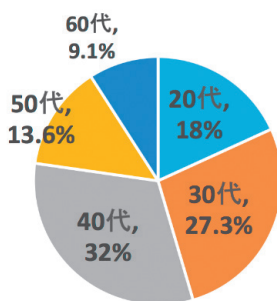


図1. 受講者の年代 (H29)

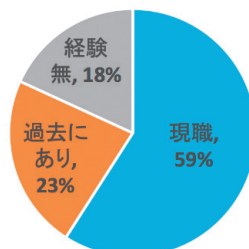


図2. 受講者の就労経験 (H29)

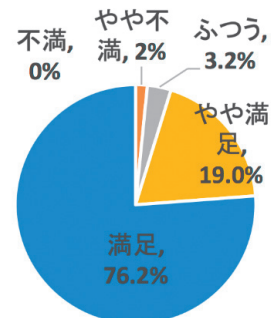


図3. 受講者の満足度 (H29)

2) 感想

自由記述欄に寄せられた主な感想は、以下の通りであった。

- ・日頃保育に追われていて、勉強したいなと思っていたので、今回の研修に参加させていただき大変楽しかったです。
- ・保育をするにあたり自分がどう子どもたち（または保護者）と向き合うべきなのか、どういう姿勢が望ましいのかを改めて知ることができ、身の引き締まる思いがしました。
- ・仕事（保育）はしていますが、少人数で新しい情報も入ってきません。ネットで見つけて参加でき良かったです。
- ・今は働いていますが、このような講義を聞いて今一度自分の保育を振り返りながら反省、

改善すべき所など見つけることができ、今後の保育にもつなげていけたらと思います。良い機会となりました。

- ・ 今後仕事（保育）をしていく上で、参考になりました。
- ・ 初めは緊張しましたが、いろいろと質問ができて良かったです。
- ・ 実際働かれた方のお話を聞いたのはとても良かったです。保育士支援の方の熱さも伝わって。自分の次に向けての気持ちの面で背中を押してもらった気がします。

以上の研修アンケート調査から、受講者の年齢層は、20歳代から60歳代まで、幅広い年齢層であったことがわかった。

平成28年からの卒後リカレント教育の場としては、受講者の約6割が現職であった（図2）ことから、今後さらに現職者が増加する可能性があると思われる。

また、受講者の満足度をみると、満足している・やや満足している者が9割を超えていることから、概ね研修内容は期待にそっていると思われる。

2. 潜在保育士復職支援の実施状況

潜在保育士復職支援プロジェクトの実施状況を動向調査によりまとめると、以下の通りである。

表2. 潜在保育士復職支援の実施状況表

項 目	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年
研修受講申し込み者数	52名	24名	28名	23名
実際の研修受講者数	31名	22名	24名（12名）	22名（13名）
就職者数（内定者含む）	5名	5名	7名	8名

*平成30年1月31日現在、（ ）内はリカレントの参加者

復職支援の成果として、平成26年は5名（5/31, 16%）、平成27年は5名（5/22, 23%）、平成28年は7名（7/24, 30%）、平成29年は8名（8/22, 36%）であった。少しずつではあるが、復帰者の割合が上昇しており、一定の成果があったと考える。

IV. 残された課題とその解決への展望

潜在保育士復職支援プロジェクトおよび卒後リカレント教育の課題としては以下の3点が挙げられる。

1点目として、本研修を必要としている人への情報の周知について課題が残っている。前年度までは潜在保育士に焦点を当て、広報活動を行っていた。しかし、多くの現職の保育士や幼稚園教諭が本研修を受講している現状を鑑み、昨年度からは卒後リカレント教育の場と

しての意味合いも強調し、広報を行った。また、本年度から岡山県の後援を得てポスター・チラシ等に記入し、配布の際にも広報の協力をいただいた。今年度は本活動に延べ61名が参加したが、前年度の参加者数（延べ57名）と比較すると、参加者は微増したにとどまっている（表2）。そのため、今後もポスター・チラシ（図4）、本学ホームページでの特設ページ（図5）の他、SNS、TV、ラジオ、新聞広告を活用するとともに、本学卒業生以外へも告知をする中で、受講者のさらなる拡大を引き続き模索していきたい。

2点目として、研修内容について挙げられる。受講者に対するアンケート調査から、研修内容について、受講者が概ね満足していたことが示された。一方で、昨年度から卒後リカレント教育の役割も担っていることから、潜在保育士及び現職保育者のどちらともが満足できるよう、より一層の授業内容の展開が必要となってくる。また、年齢層やこれまでの保育者経験年数も受講者によって異なるため、一人ひとりの受講生の意見に謙虚に向き合い、ニーズを把握したうえでの内容等の改善が望まれる。

3点目として、本研修会と本学科で行われている行事等との連携についての課題である。昨年度からリカレント教育の場としての意味合いも強化し、研修を行った。就職後の学ぶ機会を担保するためにも、研修会に止まらず、学園祭時の里帰りトーク会なども有効に活用しながら、リカレント教育を行っていく必要があるだろう。少グループで、あるいは教員と一対一のメンタルヘルス教育の機会を設け、学生時代の延長線上で、保育者として歩み続ける際の底力となるような学びを模索・実践し続けるサポート体制の充実が必要ではないかと考える。今まで以上に行政とより強固な連携をとりながら、他の大学との連携を図るなど、横縦のつながりを構築することも必要であり、養成校、保育現場、保育行政が協働で保育環境の改善に取り組むことが期待される。



図4. ポスター・チラシ（H29）



図5. 本学ホームページの特設ページ（部分、H29）

V. 参考文献

- 1) 澤津まり子・鎌田雅史・山根薫子（2015）「潜在保育士の実態に関する調査研究－離職の要因を探る－」『就実論叢』45,pp.191-200.
- 2) 澤津まり子・田中誠・秋山真理子・松本希・鎌田雅史・笹倉千佳弘・柴川敏之・Z. 山田・荊木まき子・伊藤優（2016）「潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育の活動報告」『就実論叢』46,pp.199-205.
- 3) 遠藤知里・竹石聖子・鈴木久美子・加藤光良（2012）「新卒保育者の早期離職問題に関する研究Ⅱ：新卒後5年目までの保育者の「辞めたい理由」に注目して」『常葉学園短期大学紀要』43,pp.155-166.
- 4) 森本美佐・林悠子・東村知子（2013）「新人保育者の早期離職に関する実態調査」『奈良文化女子短期大学紀要』44,pp.101-109.